

## 「風の王国」 五木寛之

紹介者：榎本博康

### [紹介]

速見卓はトラベルライター(旅行記者)である。その彼に二上山(ニジョウザン、またはフタカミヤマ)の調査紀行の依頼がくる。彼はそれまで二上山を知らなかったが、大和から見て西にあるこの山は、日の沈む浄土の山であり、また近辺には古代の陵墓が多く作られたという。

その二上山で、速見は山中を軽々と移動する人々に出遭う。特に彼が《翔ぶ女》として心に刻んだ女性は、健脚の彼も驚くものであった。そして、次第に彼等は「サンカ(山窩)」と誤称されている非定住の人々、無籍の流浪の民、そして彼等自身は《ケンシ》と呼ぶ一族の末裔であると理解されていく。それはサンカという呼称から誤解されるような山奥に棲む人々ではなく、山を降りながら平地に居つくことをしなかった人々で、セケンシ

(世間師)との呼び名から由来するとも想像されている。そして、彼等は現代に溶け込んで生活しているわけであるが、企業集団として独自の世界を構築し、さらに発展させていこうとする集団と、あくまでも歩くことを忘れずに、伝統を守ろうとする集団の拮抗が見えてくる。



### [感想]

本書は、五木寛之氏が長期の休筆の後、小説新潮(1984年7~9月)に発表した作品であり、非常に難しいテーマを取上げている。学術論文では普通だが、文学作品では珍しい巻末の参考文献リストの膨大さからも、氏が渾身の力を込めたものであることが伺える。

私としては、氏が彼等の歩きをどのように描くかに興味があるが、作品中で一つの併行する文化として、比叡山の千日回峰が語られる。最も厳しい期間は午前1時に起きて、粗末な食事だけで一日に平均84キロメートルを15、6時間で歩き続けるという。そのような行を通算一千日続ける過酷な行である。

過酷な行ではあるが、長距離ランナーである友人達にこんなことを話したら、ああ、面白そうだ、やりたいなあと思ってしまうだろう。あぶない、あぶない。彼等はこういうことに限っては有言実行なのだから。

仲間内での「格言」の一つに「一病息災」というのがある。元は「無病息災」だが、最近は少し病を持っているひとは、それで自分の身体をいたわるようになるので、却ってそれ以上の病を得ないとのことから、「一病息災」なることばも言われている。ここまでは一般の話だ。

さらにこの一病であるが、「フル百病を得て、息災に暮らす」ということで、マラソンを沢山走って健康でいようという意味で使用されるわけだ。楽しく走るには、自然と日常生活や食事などにも心を配るようになる。年間にマラソンを百回以上走る人もいて、しかも行だとか修養だとかではなくて、単に楽しんでいるのだから誰も止められない。

フル百病はさておき、本書で語られるケンシー族は、そのような千日回峰を日常とする者達である。子どもが生まれると、赤ん坊の頃から歩く事を徹底的に教え込む。歩く事を体で覚えさせる。歩くことのよろこびをおぼえ、歩くことで体の感覚が発達し、考えも深まる。そのようにして造られた《翔ぶ女》の足は、指が手指のように機敏に動く。指を開くと、左右に八つ手の葉のように開く。親指は直角に真横に屈曲する。また土踏ましが乏しく、一見扁平足のようであるが、過度の歩行による足底筋の発達のしすぎと考えられている。

645年の大化の改新以降、律令制度による、国家の基盤としての定住農耕民の戸籍の整備と租税の徴収が行われた。それは平安時代に荘園の発達などで緩んでくるが、豊臣秀吉が「検地と刀狩」を行って農耕民を固定化し、またそれぞれの土地の地力を評価して税収の安定化を図った。さらに徳川家康になって士農工商の身分制度と、米の石高を基準とした全国の管理として強化され、その一方でお国替えにより、直接支配階級と農民の分断を図り、中央集権を強化した。このように、政権がどう替わろうとも、富が米である限り、基本的な支配構造は同じであった。従ってこの構造の外にいる人達があれば、それが例え少数であっても、国家運営の大きな障害となる。それは古代では蝦夷征伐などの国家的イベントとして記録されたが、本州の山岳地などにも多数存在したと言われている。彼等はやがて同化するか、国家の支配と富の周辺でひっそりと生きる者達となって、微妙な安定を保ってきた。しかし明治時代ではさらに戸籍が整備されると共に、それを基盤として徴兵制度を実施し、刀狩以来禁じていた武器を農民に持たせて軍事国家への歩みを進める。そこでは最早ケンシの生活は認められない。国民皆兵だからだ。

どうも難しい話になってしまったが、娯楽小説なので気楽に読もう。ケンシー族は、超人的な歩く能力が、一族のアイデンティティであり、また生活の基盤である。彼らは長距離を、同行者と共に《ノル》ことで比較的容易に踏破する。早見は《翔ぶ女》と、港区高輪から伊豆山まで、百二十キロメートルの歩行をする。夜の九時に歩き始めて、最初はキロ十分強のペース歩き、やがてキロ八分強で都内を抜ける。夜が明けた後は、海岸に沿って歩くが、キロ六分のペースに上がる。早見は《翔ぶ女》の後を、遅れまいと必死で追いながら、やがて二人の鼓動は重なりあり、高めあい、正に自分も翔んでいるとの感情に支配されて、無我のうちに歩き通す。

ギリシャのスパルタスロン(250キロメートル)が1983年、サロマ湖百キロやサハラ・マラソン(7日間、約215キロメートル)が1986年に始められるなど、ウルトラ走は五木氏の思いとは別に、丁度この作品の頃から盛んになるが、共に現代への批判や反省として通底しているのかもしれない。いずれにしる長距離踏破の経験が少ない時代において、作家の想像力でこのような

世界が描かれたことは、驚くべきことである。なお、作中で超長距離は《オオノリ》と呼ばれる。これは渡鳥のように心を合わせて遙々(はるばる)と行くものである。

(初稿2001. 4. 15)

#### [リバイバル感想]

この作品のすばらしさの一つは、走りの自然さにある。そのように楽に走れたら、どんなに快感だろうか。

長谷川カップ山岳耐久レースの話にしよう。世界的な登山家である長谷川恒男(1947~1991)を記念して、彼が所属していた東京都山岳連盟が1993年から毎年開催している山岳耐久レースであり、五日市中学校をスタートして浅間峠(第1関門)→三頭山→月夜見第二駐車場(第2関門)→御前山→大岳山→長尾平(第3関門)→御岳神社→日出山→五日市会館前ゴールまでの71.5km、制限時間24時間である。この後半の山々は高校生時代に踏破したもので、なじみがあったが、前半は全く初めてであった。

#### <第3回山耐>

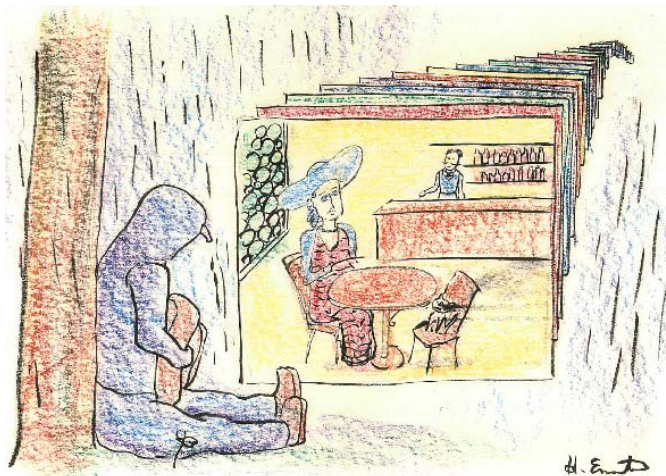
私の初参加は1995年の第3回であった。この時は山屋のスタイルで参加した。軽登山靴、ニッカズボン、ウールの長袖シャツ、リュック(水2リットル)である。優勝を狙う一団は走り屋(ランニングシューズ、ランパン、ペラペラのランシャツ)のスタイルである。スタートはおそらく16時。その頃の日没は17:20頃なので、スタートしてから、じきに暗くなる。

後ろの方からのスタートなので、登りで渋滞すると待ちになる。靴が重い。後ろの山屋組はどんどん遅くなる。やがて雨が降ってきた。ゴアテックスの上下を着ると暑い。後ろからのスタートは大失敗であった。先行する千人以上がぬかるんだ山道を幾重にもこねまわして、足首が泥に沈む。これが下り坂になるとさらに悲惨だった。山道というのは道とは言えないようなもので、長年の登山者に削られて中央部がへこんでいるので、そこを泥が流れ、足掛かりとなる岩は隠れているし、滑る。木はつかまりやすい所にあるとは限らない。木の枝を拾って杖にする。だんだんと前後の人と離れて漆黒の暗闇の中で一人ボッチとなった。雨でライトが届く距離が短い。とうとう疲れて、降りしきる雨の中、木の根に座ってしばし休んだ。以下は当時の文章である。

#### 「雨の幻影

山岳耐久マラソンは東京の奥の山々を、土曜から日曜にかけての24時間制限で走り抜ける。

最後尾から出発したが、山の登り始めで大渋滞である。一週間の仕事の疲れもあり、大して距離を行かない内に疲れてしまった。夜中になり、眠くてどうしようもない。かなりの強い雨であったが、とうとう、路傍の木に寄りかかり、座りこんで



しまった。

たちまち眠りに落ちたが、何と次々と色彩豊かな映像が訪れては入れ替わる。そして最後は十九世紀末のような、ロートレックが描きそうなカフェであった。

1995年10月7日

気を取り直して進む。急傾斜の下りがある、それが深い泥のスロープであり、とても無事に降りられそうにない。山中で回り道をして時間を使ってしまう。そして明け方に第2関門に到着し、リタイア。制限時間には至っていないが完全に戦意喪失。車でゴールに送っていただいたが、泥だらけで申しわけなかった。

#### <第4回山耐>

翌年の第4回には完走を期して、足はランニングシューズにした。怪我の心配があるのでニッカズボンとウールの長袖は必須だ。最後尾では無いが、後ろの方からのスタートである。しかし前年に前半を経験したので、この時はスムーズであった。ところが第1関門で失敗した。このレースでは最初に荷物検査があり、前半の飲料を自分で準備する必要がある。そして第2関門で1.5リットルの給水を得ることができるが、他には提供されない。コースはおおむね尾根道なので、途中で水場の案内板があるが、200m下るとか、楽には調達できない。そのようなことは承知であったが、水を飲もうとすると何とボトルが空だった。第1関門で水を飲んだ後で、キャップの締め方が甘かったのだ。しかもボトルを逆さまにしていたので、全部こぼれてしまった。雨が少し降っていたので、リュックが濡れていても気づかなかったのだ。

それからは小雨の中を、タオルが吸った雨や、木の葉の水をすくってしのいだ。かなり発汗するので、雨天で助かった。途中で崖下から登山道に這い登ってくる人がいて、転落したのだという。幸いにも怪我は無い。そして夜が明け、途中の山小屋でビールを飲み、余裕でゴールした。22時間台。帰りの電車で泥のように眠り、周りの乗客に迷惑をかけた。泥をたっぷり吸ったランニングシューズの泥がぬけず、そのまま廃棄となった。

#### <第6回山耐>

翌年はエントリーしたものの参加できず、次の挑戦は1998年の第6回。この時はスタートが13時。夕方に少し雨が降ったが、大したことは無かった。徹夜で走るのはつらいので、いろいろ考えて、夜明け前に仮眠をすることにした。5時から仮眠に適した場所を探し、やがて平らで見晴らしの良い場所にシートを敷いて寝た。そして朝日を浴びてさわやかに起きた。おかげで快調に残りを走ることができたが、残念なことにビールの山小屋には立ち寄ることができなかった。このレースの主旨の重要なひとつは、途中の1.5リットルの給水を除いて、必要な全てを自分で携帯し、完走することである。したがって途中の山小屋で買い物をすることは主旨に反する。小屋への道はロープで遮断され、係員が監視していた。運営能力が向上していた。快晴の中を21時間台でゴール。さらに余裕で完走でき、楽しかった。学校のプールのシャワーを浴びて、さっぱりとすることができた。

次の年は地方に転勤になったので、これで私のチャレンジは終わった。

(2021. 8. 11)